

# 幼兒期に於ける歌謠的律動的生活

東京女子高等  
師範學校訓導

山 内 俊 次

## 一 緒 言

幼兒が環となりお手うつないで遊ぶことはよく見受ける所のことであるが、仔細にこれを考察するならば、一種の韻文の吟誦であり、それにつれて踊ることであると見て差支ない。大勢の子供が共に一緒にならうとする觀念の大半は、出来るだけ謡ふのに適するやうに作られた唄そのものゝ中に存在してゐるとも見る事が出来る。

例へば短い言葉でも長く引つばつて謡ふことにより、この唄の中に幼兒の最初の社會生活が生れる。この環から始めて仲間としての聲が發せられる。その調子は謡ふ者にも聴くものにも、種の感動を與へねば已まないもので、爲めに仲間のものゝ意識状態が、所謂一種の恍惚境に這入つた時、この遊戯は實に最高潮に達するのである。

幼兒期時代に於ける遊戯の中に最も多く律動的なものがあつたのみならず、凡べて子供のすること爲す事それ自體が常にリズムそのものであるといふことは、幼兒教育に携はるものゝ特に留意しなければならぬ所である。又此リズムによつて子供の社會的融合が強められ社會性が陶冶されるのみならず、自然の社會的制裁も亦増されるものである。グルー氏の述べる所によれば、かゝる場合叱責の調子を有つたリズムは、仲間から除け者にされるやうな不幸な子供に對してよく使はれ、その子供に取ては特定な仲間の一人に忠告された以上により、強く感ぜられるものである。この時代を通して謡はれる言葉の中にも、又踊り廻る動作の中にも、一般に初期時代の古謡ともいふべきものが比較的多分に含まれてゐるやうに思はれる。これ個體發達の原理から、原始的な單純なものが幼兒期に於ては比較的

変され易い爲めであらうと思はれる節が多々ある。併しながら、この時代がやがて次時代へ近づくにつれ、踊りも唄ももつと特別なものとなり、舞踊といひ、唱歌といはれるやうなものに文化する。

歌謡的律動遊戯は、幼児期時代に始まるものではない。

リズムの觀念はズツト早くから、單に手や足を動かすだけの運動に於ても、又音を出し始めた時代からも現はれてゐる。子供の初期のお喋りの中には常に含まれてゐる。例へばダダダ……の中にもリズムは存する。それと同様に、子供は足で物を蹴る時にも同じことをなすものだ。二つの踵を床や椅子の上に叩きつけてドンドン……と、恰も元氣な一種の行進を眞似るやうに見える。恰も濱蟹のやうな幼児の兩手の平均運動も、氷ばさみのやうに兩手を揃へる運動も、共に律動的な満足を得んがためのものらしい。實にリズムは音に於ても動作に於ても本能的なものといふべきである。

## 二 リズムの發達の考察

幼児の郷土的歌謡遊戯とも見るものは、東京あたりに於ては、「かーごめかごめ」とか、「今年のぼたん」とか「ひーらいた〜」といふやうな歌謡は、この幼き戯曲家詩人達に充分な満足を與へるものである。これらの遊戯は、凡ての表現形式を合せ用ひた所の本質的律動衝動をよく満足させるものといはねばならぬ。私共はこの時代の子供の遊戯の中に於て踊りも詩も未だ分岐しない時代の所謂詩想の親ともいふべきリズムの本源的な形式を見るのである。

この未だ分岐しないリズムの形式は、前述せし如く或は蹴つたり、或は話したりする中にその濫觴を持つことは、最早や争はれぬ事實である。さうしてこれらのものは、又直ちに本能的に聯合するやうな傾向を持つてゐる。故に何時でも先づ総合的な分岐前の表現形式となるのである。而もこれがこの時代の特徴と見なければならぬ。さうしてやがてこの律動的要求はその發出口を此所に見出し、彼所に見出し、はた 何所にでも發見する。さうして再びより特殊なより發達した表現形式の中へ分散するものである。

斯の如くにして、この歌謡的律動遊戯の發達に於て大人

が重要な關係を持つてゐることを見逃してはならない。子供は初期に於ける以上、表現遊戯を教へない限り何物も知らない筈である。それにも拘らず、恰も社會環境が一種の娯樂に對する責任者であるかの如く、これらの表現一切を引き受けてゐるの觀がある。勿論友人社會の影響の大なるものはある。けれどもこれらの最初の影響は、子供の律動的な言葉に對する大人の應答に動機づけられて發達する。何故ならば大人は子供のアクセントや身振りに従つて、子供の言ふダダダダ……を必ずや眞似るといふ傾向があるからである。子供に向つて意味のないことをやかましく喋るのは一般に有害であるけれども、子供の合圖に答へるためのかゝる動作は餘り害とならないのみならず、これがやがて彼等の將來に大なる影響を持つのである。無意識的反射的な大人の行動も亦油斷するわけには行かぬ。

### 三 特別なリズムの遊戯

幼兒期時代に於ける律動的衝動の特別な表示としてブランコを愛好する動作となることは、これ亦重要な事柄であ

る。抑ゝこのブランコなるものに對する子供の愛好心は一般的なものであつて、而も異状なものがある。

こゝにブランコがあるとす。始めは何の氣なしにこの器具を動かして見る位であるが、直ちに綱や板の具合のよい仕掛けに氣がついて、すぐなれてこれに乗るやうになる。若し子供にブランコへ乗ることを許しておいたなら何時までも乗つてゐるであらう。電燈がついても未だ乗りつゞける位のこととは有り得ることである。

このブランコへ乗ることも、その離れわざの上達するに従つて色々と異つて來る。揺りながら片足で立つて見たり爪先で立つて見たり、綱が弛む程揺り擧げて見たり、揺り擧げた所で、板を蹴外して手丈けで身體を支へて見たりするやうな方法がそれである。而も單に前後に眞直に振り動かすのみで、同じ動作を終始續けることにさへ猶蓋さない興味を持つらし。

斯の如き魅力の原因は、これを説明すべくあまりに複雑してゐるが、子供に對するこの魅力の一部分は、想像力に於ける刺戟に見出すことが出來ると思ふ。私井が馬に跨つ

て、狼か豹の追跡に出逢つたやうなことを想像する場合それ等を完全に逃れて身命を全うするためには、一に我が馬の驚くべき跳躍疾走によらねばならぬ。その時の飛躍は恰かもブランコのその如くであらうと想像する時、迅速な行動そのものが、彼の多くの競技の如く、所謂異状の魅力を持つものである。

又次に墜落の要素の中にも何物か愉快なものがあるらしく思はれる。速かに墜落するといふやうな情緒を起す近道はこのブランコを措いて他にないやうである。

一體墜落は、一時に多くの内臓に同様な感覚を引き起す其感覚は一種の恐れと好奇心と一所になつた様なものである。兎も角公園のやうな子供の快樂を多く所有してゐる所では、その運動器具がこの感覚を所有してゐる。子供はそれを自分にとらうと努めてゐる事は興味ある事實である。

而しながら、ブランコのより大なる魅力は、矢張りリズムの感覚の満足にあると思ふ。それは私共の心の奥深くある所の、完全な循環的對照が、特別な形式によつて律動衝動を満足させるのである。前に揺れ、後に揺れ、その間に

休止を持つといふこの形式は、互に相交互するリズムの對照を、最も適切な形式で現はしたものである。前後、上下、努力と休息、社會性と孤獨性、相同じものと、相異なるもの、斯の如くにして、この交互作用を私共は永久に續けて行くことが出来るのである。

#### 四 リズムと子供の生活

子供をして、ブランコに乗せることの交互リズムは、人生活に色々な形式で現はれる。行動に於けると同じく、音の對照にも亦魅力は充分にある。有名な日蓮宗の御會式頃になると、小さな子供まで、盛に「ドンツクドンツク、ドン〜ツク〜」を繰返し〜「ロすさんで、何時までもやまない。村のお祭頃ともなると「ピーピーヒヨロロ、ピーヒヨロロ」等と口ずさみ、運動會ともなれば一赤勝てよ「白まける」と繰返し、「ジャンケンポンヨ、イシカミジャンヨ」と口ぐせのやうに繰返す。

この交互作用は、あらゆる文學、音楽、詩、建築繪畫の中にも常に流れてゐるものである。讚美歌の美の一部分は、

その應答唱歌の中に、私共が朝と夕、晝と夜、押寄せて來る浪と引返し行く浪の恒久的なりズムを聞くことにあるのではなからうか。

ブランコに乗ることや、或はこの交互リズムの形式が子供等に齎す満足の原因が何であるかに就ては、最早や甚だ困難な問題であるが、而しそれは人間生活の必然的なリズムと一致してゐるやうにも思はれる。例へば努力と満足、外出と歸宅、夜に會ひ朝に別れる。質問と應答、冒險と成功、需要と供給等のやうなものである。

併しリズムの他の形式に於けるが如く、この満足は分析することが出来ないやうである。私共がそれを好むのは、好むやうに調子を合せるからである。釣橋が盛に揺れるのに對して、私共もこれらのものに對して揺れるのである。

要するに、リズムは私共の精神組織の究極的な事實である。

何故に交互に息を吸ひ又呼き、心臓が内縮し擴大し、さうして働き休まねばならないかに就ては、確かに物的な理由があるであらう。併し人間がこの交互作用を既に有つてゐるといふことは、私共が精神的に話し得る、律動的動物

である事實によつて説明さるべきであり、私共の喜びがこれら肉體的な状態によるリズムの中にあると説明すべきではなくて、自然は人間の身體的組織をも含む色々な他の物體のリズムに適合すべく、私共の精神を律動的にしたものだと見ることが出来る。

傾斜することは、子供の好む交互リズムの他の形式である。設備の整つた運動場に於て、動揺したり、傾斜したりする色々な形式の器械として、ブランコ・シーソー、廻轉シーソーや廻旋塔、躍動臺や遊動圓木などが、その大部分を占めてゐることは、興味ある事實である。水平棒や並行棒或は梯等も子供は大いに使用するが、大部分は交互リズムといふよりそれから廻轉したり飛び下りたりする方法に於てである。

單なる跳り方や、音の遊戲から發生して「まゝごと遊び」により、他方に於ては「環遊び」によつて、舞踊、文學劇等に發達したリズムは、藝術の根本をなすものであつて、少くとも子供の生活の凡ての場合に必要な要素である。人生の中に於て、この本能の活動力がなかつたら人は

藝術家たる事も出来ないであらうし、人をして同情的感動に敏感ならしむる事も出来ないであらう。若し之等の働きがなかつたら、藝術鑑賞家たるの資格はないであらう。

リズムの本質は、常に行動の觀念の中にある。平素趾の中にもリズムを感じなければならぬ。この意味から舞蹈は藝術の親である。さういはれてゐる。有名なショパンは、彼の音楽に對する靈感をエツスラーの舞蹈から得たと傳へられてゐる。音楽は生理的解剖學的活動を取り除いた舞蹈であるといはれ、詩や建築に於てその行動を回想させるものも亦舞蹈であるといはれてゐる。

凡て私共を感動させるものは行動であり、行動を何等かの形式で現はしたものが舞蹈である。さうして、リズムは私共に對する行動の聲である。又人間の心に浸み込む行動の形式である。

子供をして偉大な藝術の世界に迄擴充しようと欲する人は、藝術の眞髓が色々な子供の動作によつて子供の心に確實に理解され、又その生長の要素と確かに結びつくやうに遊戲を奨めなければならぬのである。

## 五 偉大なリズムの働き

リズムによる團體的遊戲は、その團體精神をしてよく無私の境地へと達せしむるといふことの社會的意義を考へると、律動本能の機能といふものが明瞭になつて來る。即ちこの本能によつて、遊戲の精神的最高潮を招來すること、人類に對して測り知ることの出来ない奉仕をするものである。實にリズムは尊き社會的融合の使者であり、偉大なる世界的融合の媒介者である。

このリズムは私共日常生活に於て、最も密接な關係にある所の有形的な共働にも亦必要缺くべからざるものである。例へば私共が乗馬で、ジャンプを練習中よく經驗することである。始めは誰しも一様に型の如く馬の耳のうしろを衝いて見るが、不結果に終るであらう。而しながら漸次練習するにつれて、遂には馬の行動のリズムを知るやうになり、馬と自分との一致を見、そのジャンプの行動の起る直前に精神にそれを豫知することが出來て、乗馬者の意の如くによい結果を得るやうになる。人は稱して、それをジ

ヤンプの「コツ」といふ。一にリズムを通しこの身心一致の境地を見出すことに外ならない。

誰しも、その「コツ」を體得しなければ、大きなトランクを容易に列車に持ち運ぶことは容易でない。漁船を砂濱から波打際まで引きずり下ろす漁夫達の、あの「コツ」は速かにリズムの偉大な力である。何事に於ても一人の人間が出来る範圍を越えた仕事は、リズムによる社會的共働によつて容易に達成することが出来るものである。

共働行爲が、反覆作用のものであると、そこに一層リズムの重大な使命が生ずる。これは漁船に乗る多くの漕手のよく知る所である。航海といふことが未だ帆船萬能時代の幾多の船歌なるものが、よく當時の消息を證明してゐる。多數の漕手の漕ぎ方を指揮することは、オーケストラのタクトを取るのに髣髴たるものがある。昔から漕手を一齊に漕がせる手段として、歌謡を伴はしめたのは偶然のことではない。以來今日に至るまで漕手の屈伸運動は實に音樂的なものとなつてしまつた。

我が國の習慣として、普通建築の土臺下の地かためには

「地づき」と稱するものがある。神社佛閣の如き大建築にはそれに伴つた大規模の「地づき」を行ふ。多數の工夫が「地づき唄」と稱する者により共働の効果によつて目的を達成するのは、リズムの力と言はねばならぬ。これとても、そのコンダクターに相當するものがあつて秩序整然たる團體行動を統禦する。所謂「音頭取り」がそれである。橋梁道路の土木工事に於ける「ヨイトマケ」も亦これに外ならない。

人類の心理學的結合は効果の最も多いものである。例へば音樂的な力で、かの漕手の身體を遂に立派に作つたばかりでなくその鑿までも作つた。故に船を思ふまゝに操縦するのみならず、氷山も猛獸も樹木も遂にこれを容易に征服するの力とはなつた。人が自然を征服するの力とはなつた。人が自然を征服するの力とは正にこれであつた。

聯隊は兵卒の足に對して規則正しいばかりでなく、その心に對しても嚴格である。故に進軍する時その心持ちも亦聯隊にピタリと合つてゐる。リズムは社會的な鍔金術師である。彼は個人の心をも氣質をも彼のとなへる呪文に従ふ一つの本質の中へと融合させる力を持つてゐるのである。

子供達が誇ひ、歩き、踊る時に一環遊び一に於ける如く彼等はどうしなくてもハツキリと聞くことを知つてゐる。

他のものは今何をしてゐるか、何をしようとしてゐるか、又「彼等は如何に考へてゐるか」と。

さうして各々は、他の者が知ることをも亦知つてゐる。

而も此歌や運動が深まるにつれて、お互が完全に理解し合ふのである。其理解は、リズムの影響が増すにつれて益々深まつて行く漣、波、波濤、怒濤……遂にその仲間の情緒が恰も潮の流れのやうに同じ鼓動に搖れて來るのである。

## 六 リズムと教育

ギリシヤ人は色々な形式に於て、彼等の教育の基礎をリズムに置いた。彼等はそれをミュージック (Music) と稱したのである。

ルネッサンスに於けるイタリヤ人は、詩人であり、畫家であり、ギリシヤ文化の模倣者であり、研究家であつた。

ミルトンは音楽及び詩の地位を教育に於て重要なものとして次のやうなものに信じた。

「彼の學校の生徒は、食事前の休憩時間に於て、音楽の莊

嚴な曲を聞いて、勉強に疲れた精神を整頓することが出来る。その間にオルガンの上手に弾くものが、高尚な演奏法を以て空想的な音楽を奏し、或はコーラスのメンバーが如何にも上手な誇ひ振りで優れた作曲家の歌を誇ひ出す。さうかと思ふと、一方やはらかな閉鎖音の樂器をかんでて宗教的な歌をかもし出して來る。これらの音楽は、彼等の性質態度の上に大きな影響を招持するものであつて、粗雑さを善良温順にし、狂暴性をもよく矯正し得るものである」と。

ドイツ國民性は、シラー (Schiller) の詩、並にベートウベン (Beethoven) の交響樂の中にある。祖國といふものは政治組織の完成される以前、既にこれらの詩や音樂の中に明かに存在してゐたのである。戦争や政治的手腕は、リズムが既になした所のものを單に是認するに過ぎない。このリズムの建設的な偉大な力は、なほその力を支へるために存在してゐる。曾て或るドイツ人が、市民合唱團の一メンバーとして晴れのコーラスを終へた直後、聴衆の外人に言つて曰く、「ドイツ人がこのやうに誇ふ間は決して征服されないぞ」と。實にその通りであつた。經濟的には屈服の已むなき破目に陥つたが、精神的には決して敗北しなかつ



た。寧ろ異狀な愛國的精神にもえ、現に目覺ましき復興振りを示してゐるではないか。

リズムによる教育は、多くの人にとつて非實際的のものゝ如く見える。實業家の要求する子供は、文字を書くことが出来、計算が出来、一般常識を具へてゐさへすればよい。實業方面に於てリズムは何の用があらうといふ。斯の如くに考へ又感ずる人ゝは或る理由からさうした子供が非常に實際的だといふ迷執を持つてゐるのである。

而し、斯の如き子供が果して實際的なものであらうか。子供が尊重することの出来る生活方法により、人間に對して完全な知識を傳へることに於て、ギリシヤ人やイタリヤ人は、他のものより成功しなかつたであらうか。單に實業問題について考へても、誤まれる彼等の行動に於て致命的な打撃を受けた如くドイツ人は世界の市場から急速に没落して行くものであらうか。寧ろ其反對に彼等ドイツ人こそは、現在世界に於て最も優れた實行的な國民ではないか。ドイツ人の實行教育に於ける凡ては、徹頭徹尾愛國的理想主義である。さうして音楽が深くその經緯をなしてゐる事は特に注意すべき點である。此意味に於て靈の修養は實業方面に於ても、人間機構の重要な部面であるといへよう。

屢々考へられたやうに、若しも靈の修養が實業に於ける防害であり、又扁桃腺や附録の如きものとして處置され得べきものならば、それを除去した方が賢明な策であらう。實業に於ける成功は必然的に人生に於ける成功を意味してゐるだらうか。私共が本當に認める所の有力な人物とは自己の人生をよりよく救ふ人であり、その精神を遺憾なく行動に現はすことの出来る人である。若しも精神を取殘して出發することが出来たとて、いくら行つても全然別な人間にはなれない。遂ひに引き返して再び出直さなければならぬまい。私共は如何に遠くへ旅したかを數へるのでなく、如何に遠くまでその理想を持運んだかが重要な問題である。その外のことは畢竟するに籠の中の栗鼠みたいなもので、いくら激しく行動したとて、そこに進歩はあり得ない。

リズムは靈の生長發展に於ける一つの方法であり、人間の精神の必然的な態様であつて、靈の究竟の目的地へ向ふ唯一の道である。エマーソンが言つたやうに、私共の實際的な要求でさへも譎ひ且つ踊らなければならぬ。況んや子供の世界からこの律動本能を取去らうとすることは、競走に松葉杖をつかせて出すやうなものであると。不自然も之より大なるはあるまい。